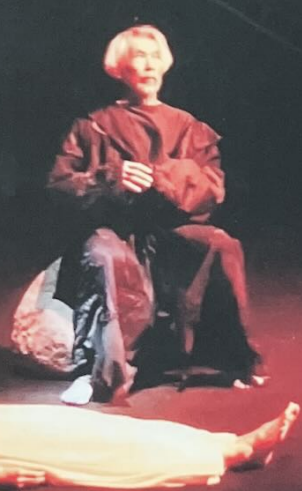


Bilingual Magazine for Art & Culture from Japan

ONBEAT

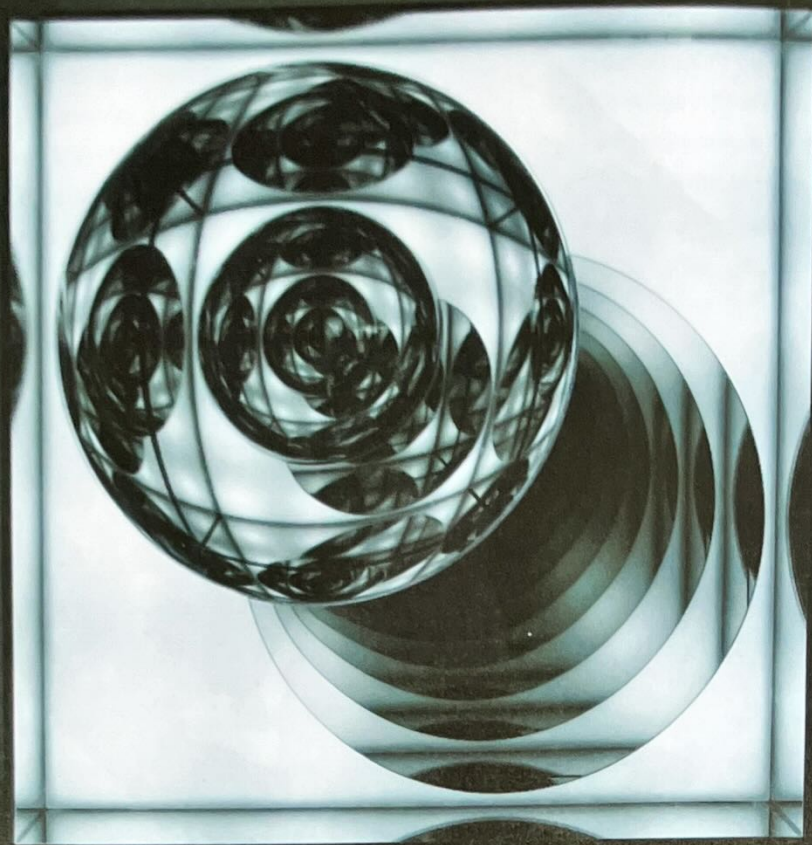
vol. 19



TANAKA Min 田中湊
TAKATANI Shiro 高谷史郎

MIYAKE Mai ミヤケマイ
Salif KEITA サリフ・ケイタ

ART WEEK TOKYO アートウィーク東京
OYAMA Enrico Isamu 大山エンリコイサム



box-ordered 400 2020年 アクリルミラー、LED 40.0×40.0×16.0cm
box-ordered 400 2020 Acrylic mirror, LED 40.0×40.0×16.0cm

撮影：助田喜久 Photo:Yoshihisa SUKEDA

Kazuto IMURA

Creating an unknown experience with “mirror x technology”

井村一登

「鏡×テクノロジー」によって未体験のアート作品を創造

「自身を内包させた鏡を他者に見せること」をテーマに、鏡を使用した作品や鏡自体の制作を行う井村一登。人と鏡の関係性の変遷を探るため、光学機器や映らない鏡、魔鏡、黒曜石、回転液体鏡など、素材や技法を横断しながら、現代の科学から神話や祭祀など考古学的観点まで遡ってリサーチを続けている。AGC横浜テクニカルセンター内にあるAO Galleryで個展「xnumx」（ナンバー）を開催中の井村が、その独創性に満ちた作品群が誕生するまでの軌跡を語った。

Kazuto Imura creates works using mirrors and mirrors themselves under the theme of “showing one’s inner self through a mirror to others.”. He has been researching the transition of the relationship between people and mirrors, using a variety of materials and techniques such as optical devices, mirrors that do not reflect, magic mirrors, obsidian, and rotating liquid mirrors, and tracing back from contemporary science to archaeological perspectives such as mythology and rituals. Imura talked about the process that led to the creation of his works, which are filled with originality.

鏡を使用した作品や鏡自体の制作を行っています。鏡像や写真は、外見の再現の像であり、それ自体ではありません。内面、外見を双方から知る存在がないことになります。自分自身の内面は自身のみが知り、自分自身の外見は他者にしか見えません。そこに着目し、「自身を内包させた鏡を他者に見せること」をテーマに制作しています。なので、光学機器や映らない鏡、魔鏡、黒曜石、回転液体鏡など、素材や技法を横断しながら、現代の科学から神話や祭祀など考古学的観点まで遡ってリサーチしています。人と鏡の関係性の変遷に興味があるんです。

現在、AGCで行っている個展のタイトル「xnumx」を「ナンバー」と呼んでいるのですが、デジタルデバイスで数字のコピー&ペーストエラーを示しています。100%の反射率は物理的に存在せず、「完全なる反射」=増殖として、mRNAによる遺伝子情報の転写であると捉えています。デジタル情報を加速度的に「増殖」させることを可能とするAGCのミラーディスプレイによって、私が追い求めてきた「完全なる反射」を(pure reflection)として実現しました。

よく鏡とは何かと考えます。鏡は素材や技法によって規定されたものではなく、完成した状態を指すのかなと思いました。机とか椅子、箱のように、素材が木や金属、何で作られてもそれを机や椅子と呼ぶことに近いのかもしれない。

鏡はどれだけ時代が変わっても、構造的には表面鏡か裏面鏡の2択しかないんです。表面に塗装、表面を研磨、透明素材の裏面に塗装の3パターンしかないのであれば、どう構造で遊んでいくかということを考えました。

私が鏡の作品を作るようになったきっかけは大学時代まで遡ります。2011年に京都市立芸術大学の総合芸術学科に入学しました。美学を専攻したので作品制作をする必要はなかったのですが、受験科目の「実技」の延長感覚で手を動かすことを目的に制作を継続しつつ、美学の研究、調査を目的にロンドンの「フリーズ」、「ヴェネツィア・ビエンナーレ」などアートフェアや芸術祭を巡りました。そこで実際に巨匠の作品と対峙して衝撃を受け、自身の感覚を、手を動かすから表現へ調整しようと試みました。

最初に制作した作品は「天球儀」の彫刻でした。その時、視覚的に美しいものを作りたかったので、Googleで「美しいもの」と検索しました。その回答が「宇宙」だったので、それを表現したかったです。(後になって思えば、最初に「天球儀」の作品を作る時に、私がGoogleに尋ねた「美しいもの」は、あの有名な「鏡よ鏡、世界で一番美しいの

は誰?」という質問と全く同じだと気付きました。私が「鏡」をメインモチーフに制作を続けていくことを考えると、とても象徴的な話です。)

それ以降、海外で影響を受けた製品的なクオリティを求め、学外の専門知識を持った工場の人たちと現場で考えながら作品をつくっていきました。2013年に「合わせ鏡」を試していて、たまたま膨らんだ鏡を使ったところ倍率が変わったことがヒントになり、後にシリーズ化していくことになる作品(wall-ordered)が完成しました。それは自分が好きな数列の世界のようでもあり、数学とアートが自分の中でつながりました。自分にとってそのような素材遊びから「作品」が生まれたことは衝撃的であり、アーティストとしての自我が芽生えた瞬間だった気がします。

その後の「石器」との出会いは、私にとって、とても重要な気づきを得た出来事でした。2017年頃のことですが、国内外の展覧会に精力的に出品し続けているうちに、次第にアイデアが枯渇していく感覚がありました。そこでもう一度「自分でものを作る」ことに向き合いたいと思い、美術が生まれるよりも昔のことをやってみたいと思ったのです。

私は、人類にとっての「ものづくりの原点」だといえる石器を作ろうと考えました。たまたま明治大学で行われていた黒曜石のシンポジウムに行き、関係者の方に相談したところ、石器を専門的に研究しながら30

撮影：藤新亨 Photo: Kenyuu GU



wall-ordered horizon 2022年 ガラスミラー、LED、額縁 45.0×45.0×9.1cm
wall-ordered_horizon 2022 glass mirror, LED, frame 45.0×45.0×9.1cm

年間ぐらい黒曜石を割り続けている岩宿博物館で当時館長をされていた小菅将夫氏を紹介していただきました。その方がなぜ黒曜石を割るかというと、黒曜石の割り方や、その破片を調べることで、当時の人類がどういう生活をしてたのかを示す資料になるからです。今までずっと独学でやってきた私にとって、石器作りサークルに参加して、初めて人の指導を受けました。なので、私の制作の先生は、小菅さんかもしれません。また、改めて黒曜石を調べていくと、実は紀元前6000年にトルコのチャタル・ヒュクで、黒曜石を「鏡」として使っていた時代があることが分かり、私が魅力を感じていた「鏡」と「石」がつながりました。自分が原初

の鏡に触れていたんだと思った瞬間、私の頭に「歴史上で鏡として使われてきたものを全て作品にする」という考えが浮かびました。再び「鏡」という縛りができた瞬間に、今まで渴望していたアイデアが無数に湧いてきました。

ガラスミラーや、アクリルミラー、さらに選んで水や黒曜石等、存在した鏡、考える鏡を全てやろうと考えました。まず初個展にそれらを押さえて間に合わせるが必要だと考えていました。個展までの制作期間は1年間だったので、同時に進行させるしかなく、具体的に素材、技法、構造歴史に触れることで爆発的にアイデアが増えていきました。

自分で定めた「鏡」というテーマは、視野を狭めて縛るのではなく、逆に無数に広げてくれるものでした。水という題材ならこれもできる、銅鏡だけでもこれだけできる。じゃあ何を選ぼうかと、もはやもう浮かびすぎて取捨選択を強いられるぐらい、発想が急に湧いてきたところで、初個展に挑むことになります。

鏡の支持体となっているガラスを勉強するために、ガラスの研究所や工房を見学させてもらう中で、歪なガラスの塊に出会いました。それを割って石器にするか、磨いて鏡にするかと思案するうちに、「自分が映らない鏡」というテーマがふっと降りてきました。歪な形状そのままに残し、その一部のみを鏡面にする事で、鏡なのかガラスなのか分からない歪な塊の作品《mirror in the rough》が完成しました。

最初の《wall-ordered》ができたのは2013年ですが、鏡がどうやってできるのかを理解したことで、継ぎ目など表現としてノイズになりうる部分を全て解決できるようになりました。それにより、7~8年越しでようやく《wall-ordered》を、自分にとって納得のいく完成体とすることができました。

そうして2021年に三越コンテンポラリーで行った初個展では、《wall-ordered》シリーズと《mirror in the rough》シリーズを中心に展示をしました。コロナ禍でのデビューとなりましたが、作家仲間がみんな広報や応援してくれたおかげで反響があり、Sense Island - 感覚の島 - 暗闇の美術島 2021やマツモト建築芸術祭など多くの展覧会に呼んでいただく一方で、企業とのコミッションワークやブランドのウィンドウで展示をさせていただくなど活動の幅が広がり、作品単位の素材の実験から、展覧会単位の空間の実験も意識するようになりました。2022年に始まったAGC横浜テクニカルセンターで開催された「国際ガラス年特別企画展」に合わせて始まったAO Galleryでの展示は今も継続しており、定期的に作品を入れ替えながら、新しい発想に繋がる場にさせてもらっています。

今後の展開としては2パターン考えています。



撮影：藤野孝
Photo: Kenyuu GU

invisible layer 2022年 ABS板、塗料
invisible layer 2022 paint on ABS Resin Board



撮影：室川悠之介
Photo: Yunosuke MIYAKAWA

loose reflection 2023年 黒曜石
loose reflection 2023 obsidian

一つは、現在やっている鏡の歴史というものの取り組みを、より強固にしていくことです。

マテリアルを横断しながら鏡をテーマに制作することは自身の武器であり、人と歴史の関係性を知る近道なので、水面や黒曜石から現在の鏡まで包含して考えていければと思います。

もう一つは、素材、歴史とは別に鏡の要素から抽出したテーマ性から発想した制作です。この約3年間、石器を割り出してから素材、技術、構造など様々な知識が身についたので例えば、「ハウリングという現象は音の合わせ鏡なのではないか」と考えてみる、鏡を使わずに「反射率」や「増殖」など鏡にまつわるテーマで鏡を想起させることを今実験的に制作しているので形にしたいなと思っています。

今後はテーマを広げて、鏡というもの、さらに鏡を想起させるもの、私が別のものを作っても「この考え方は井村っばいかも」と思ってもらえるような、作品作りや作家像を目指していきたいと思っています。

撮影：藤野 圭
Photo: Kenryou GU



mirror in the rough 2020年 ガラス、塗料
mirror in the rough 2020 glass, paint

I create works using mirrors and engage in the production of mirrors themselves. Mirrors and photographs are reproductions of outer appearances, and they are not the actual things themselves. It means that there is no way of knowing both the inside and the outside of something. Your inner self can only be seen by yourself, and your outer appearance is only visible to others. My practice focuses on this idea, and I make work with the theme of "showing one's inner self through a mirror to others." Therefore, I conduct research that spans various materials and techniques – from optical devices to non-reflective mirrors, magical mirrors, obsidian, rotating liquid mirrors – and delving into subjects ranging from contemporary science to mythology and even archaeological findings. I'm interested in the evolution of the relationship between humans and mirrors.

My current solo exhibition at AGC "xnumx" is pronounced "number," and the title alludes to the errors in copy and pasting on digital devices. It is physically impossible to realize 100% reflectivity, and I believe that 'perfect reflection' is biological multiplication, likening it to the transcription of genetic information through mRNA. With AGC's mirror display, capable of exponentially "multiplying" digital information, I've achieved what I've been pursuing as "perfect reflection" in my work, pure reflection.

I often wonder what a mirror is. I wondered if a mirror is not defined by a material or technique, but refers to a finished state. It might be similar to calling something a desk or chair, regardless of whether the material is wood, metal or some other material.

No matter how much has changed over time, structurally there have only been two types of mirrors: front-surface and back-sur-

face mirrors. This means that there are only three techniques for making mirrors – applying a mirror solution on the surface, polishing the surface so that it is reflective, or applying the solution on the back of a transparent material. Because of this, I think about how I can play with their structures.

My start in creating mirror works goes back to my university days, when I enrolled in the Department of General Science of Art at Kyoto City University of Arts in 2011. My major was in aesthetics theory so art practice was not necessary, but I continued to create artworks as an extension of the practical skills that were required for my entrance exam. It was during this time that I went to research art fairs and festivals such as Frieze London and Venice Biennale. It was during these experiences, where I came face to face with the works of renowned artists, that I was profoundly moved, and it influenced me to adjust my own senses from merely moving my hands to using them to express.

The first work I created was a sculpture of a celestial globe. At that time, I wanted to create something visually beautiful, so I asked Google to tell me what was "beautiful," and it told me that the universe was beautiful and so I tried to create it. In hindsight, I realized that this process of asking Google was remarkably similar to the famous story of the Queen asking, "Mirror, mirror on the wall, who's the fairest of them all?" I think it is a symbolic story for me, as mirrors have been a central motif for my artistic practice since then. Subsequently, I sought to achieve a product-like quality influenced by my experiences abroad. Collaborating with industrial experts outside of academia on-site at their factories, I delved into the pro-

cess of creating artworks. In 2013, while experimenting with infinity mirrors, I stumbled upon a unique phenomenon when using a convex mirror. The magnification of the image changed with the curved mirror, and led to the production of wall-ordered. It reminded me of the world of number sequences in mathematics, and it marked a moment when my passion for mathematics and art converged within me. The process of creating works from playful exploration with materials was a revelation for me and it also marked the emergence of my artistic identity.

My later encounter with stone tools was an event that brought me to a very important realization: Around 2017, as I continued to vigorously exhibit in national and international exhibitions, I had the feeling that I was gradually running out of ideas. It was then that I felt I needed to revisit the act of creating something with my own hands again, and had an urge to delve into objects that predated art itself.

This led me to contemplate crafting stone tools, which can be considered the "origins" of human craftsmanship. By chance, I attended a symposium on obsidian at Meiji University, and I sought advice from the attendees. They introduced me to Masao Kosuge, the director of the Iwajuku Museum, who has been specializing in the study of stone tools and has been knapping obsidian for nearly 30 years. His motivation for knapping obsidian was to understand the lifestyles of ancient humans by examining how obsidian was knapped and observing the resulting fragments.

I joined their stone tool-making community, and because I had

been self-taught all my life, it was the first time I received guidance from others. In that sense, one could say that Mr. Kosuge was my teacher in this endeavor. As I delved deeper into obsidian as a material, I learned that around 6,000 BC in Çatalhöyük, Turkey, obsidian was used as a mirror. This allowed me to find a connection between mirrors and stone, which both fascinated me. As it dawned on me that I was touching the most primal form of a mirror, the idea of creating art works from everything that had historically been used as a mirror came to mind. As soon as I imposed the constraint of "mirrors" once again to my practice, a myriad of ideas that I had been craving for came to me.

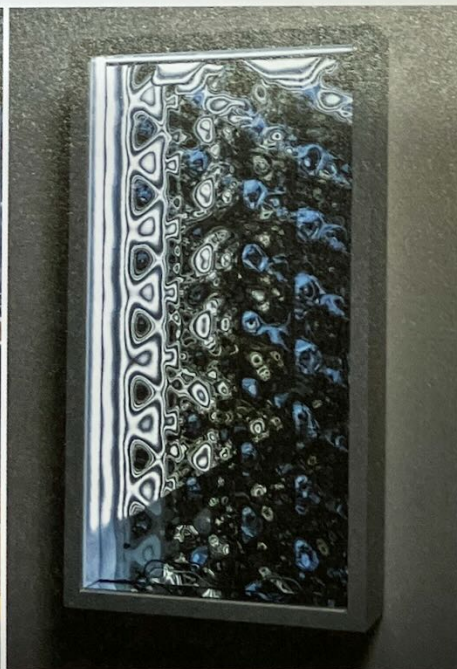
I decided to explore all types of mirrors that have historically existed, such as glass mirrors, acrylic mirrors, and even further back, water and obsidian. I thought it was necessary that I had control over them before my first solo exhibition. Since I only had one year to produce the works before the exhibition, I had no choice but to work on various mediums at the same time, and as I came into contact with specific materials, techniques and historical narratives, the number of ideas in my head exponentially expanded.

The theme of mirrors, which I had set for myself, did not narrow and bind my vision, but on the contrary, broadened it in countless ways. Each element I explored, whether it was water, copper mirrors, or any other, seemed to trigger a multitude of creative possibilities. The challenge then became a matter of deciding what to focus on amid this torrent of ideas, as they poured in at such an overwhelming rate. This laid the groundwork for my debut solo exhibition.

As I visited glass laboratories and workshops to study the glass that supports mirrors, I came across a distorted block of glass. As I contemplated whether to turn it into a stone tool or polish it into a mirror, the theme of a "mirror that doesn't reflect oneself" suddenly struck me. I left the distorted shape as it was and polished a portion of it into a mirror surface, creating a mass that seemed to blur the lines between mirror and glass. I called the new work mirror in the rough.

The initial iteration of wall-ordered was completed in 2013. However, it was only after understanding how mirrors were created that I could resolve all the concerns I had about seams and other aspects of the work that could create noise in the artistic experience. It was then, after 7 to 8 years, that I felt that I had finally created a version of wall-ordered that I was truly satisfied with.

And so, at my first solo exhibition at Mitsukoshi Contemporary in 2021, I put the wall-ordered



撮影：園創子 Photo: Kenyuu Gu

左：展示風景：「window-ordered」AO Gallery(AGC横浜テクニカルセンター) 2022年
 left: Installation view: window-ordered AO Gallery(AGC Yokohama Technical Center) 2022
 右：window-ordered 2022年 ガラスミラー、アルミミラー、LED、額縁 68.6×34.5×9.3cm
 right: window-ordered 2022 glass mirror, LED, frame 68.6×34.5×9.3cm



wall-ordered ellipsoid bronze 2022年 ガラスミラー、アクリルミラー、LED、額縁 36.7×68.2×13.5cm
 wall-ordered ellipsoid bronze 2022 glass mirror, LED, frame 36.7×68.2×13.5cm

and mirror in the rough series in the center of the exhibition. Despite debuting during the COVID-19 pandemic, thanks to the support and promotion from my peers I have fortunately been invited to participate in many exhibitions, including Sense Island Sarushima Dark Museum 2021 and Matsumoto Architecture + Art Festival 2023. I also received offers to make commission work for companies and shop windows for brands, and what started as experimentation of materials in works, was now experiments in spaces and experiences in exhibitions.

Looking ahead, I have two potential directions in mind for my future endeavors. One direction is to consolidate and strengthen the work I am currently doing on the history of mirrors. Being able to work on the theme of mirrors across multiple materials is a unique strength that I have, and it is also a shortcut to understanding the relationship between people and history. The practice encompasses everything from water surfaces to obsidian and modern mirrors and I hope to continue expanding this exploration.

The other is to create works inspired by themes derived from the elements of mirrors, that are independent of its materiality or history. Over these past three years since I began working with obsidian, I have acquired various knowledge about materials, techniques, and structures. For instance, I'm currently experimenting with the idea that the phenomenon of "howling" in sounds, might be a phenomena that alludes to themes like reflection and multiplica-

tion without necessarily using mirrors. These experiments are still in production but I hope to realize them one day.

In the future, I hope to broaden these themes and establish a recognizable artistic identity where regardless of whether I create something with mirrors, or allude to mirrors, or perhaps something completely different, people would still see the works and think, "This approach feels like Imura."

Kazuto IMURA

井村一登

1990年京都市生まれ。2017年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻 修了。2023井村一登 展「mmmwm」(日本橋三越本店コンテンポラリーギャラリー)マツモト建築芸術祭2023(信毎メディアガーデン/長野)2022年Sense Island - 感覚の島 - 暗闇の美術島 2021(猿島/神奈川)

1990 Born in Kyoto. 2017 Completed the post-grad course in Intermedia Arts at the Tokyo University of the Arts.
 2023 Solo exhibition "mmmwm" (Nihombashi Mitsukoshi Contemporary Gallery) Matsumoto Architecture + Art Festival 2023 (Shinmai Media Garden, Nagano)
 2022 Sense Island Sarushima Dark Museum 2021 (Sarushima, Kanagawa)